

古事記上卷

序并



易の易の命を述べて天の成り分し前有大易  
又の易の成り分し前有大易

臣安萬侶言史混元既凝氣象未效

易の易の命を述べて天の成り分し前有大易

無名無為誰知其然乾坤初分叁神作

天之御中主神  
高御產靈日神

造化之首億陽斯開二靈為群品之祖所以

出入幽顯日月欽札洗目浮沉海水神祇

やまとの名品

天理図書館

古事記 道果本 (重要文化財)

縦 25.6 cm 横 16.3 cm

永徳元 (1381) 年写

「天の岩戸」「八俣の大蛇」「因幡の白兔」などは、誰しもが耳にしている神話であろう。しかし、これらが『古事記』や『日本書紀』に書かれている物語とは、案外知らない人も多いのではないだろうか。この両書はあわせて「記紀」と呼ばれ、共にわが国草創の由来を綴った歴史の書として、その名が知られている。『古事記』三巻は、勅撰の正史である『日本書紀』に先んずること八年、七二二年の選録その序文によれば、天武天皇の詔によって、聡明な舍人・稗田阿礼が暗誦していた帝紀（天皇の系譜）と旧辞（古い伝

承）を、太安万侶が書き記したとある。『古事記』は謎の多い書物である。わが国の現存最古の典籍にも拘らず、不思議なことに、成立の事情を窺い得る手掛かりは、この序文の他はまったくない。そのため江戸時代には、この序文を疑問に思い、『古事記』を偽書と唱える国学者も現れた。あの賀茂真淵も弟子の本居宣長に宛てた書簡



に、その意味のことを認めている。

謎の一つに、伝本の少なさもある。平安時代初期まで遡れるほど、『日本書紀』には多くの古写本が残るが、『古事記』は一三七一・二年に写された「真福寺本」（国宝）を最古とする。この「道果本」は一三八一年、真言僧とみられる道果の書写。「日本紀の家」といわれた京都の神官・吉田家に伝来した。伝えるところは、わずか巻上の前半のみだが、「真福寺本」に次ぐ貴重な古写本である。その伝存の意味は大きい。

（天理図書館 岸本眞実）

天理図書館のお知らせ Tel:0743-63-9200 <http://www.tcl.gr.jp/>  
 平日(午前9時～午後5時半) 土・日・祝(午前9時～午後4時半)  
 ただし6月29日は休み  
 (本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください)